

再発見！レ・シエクルとフランソワ・グザヴィエ・ロトが極めるベルリオーズの世界

取材・文：船越清佳
Text: Sayaka Funakoshi

その刺激的な音楽作りにいま世界中が注目する古楽オーケストラ「レ・シエクル」。そしてそれを主宰する指揮者のフランソワ・グザヴィエ・ロト。パリで彼らが進めるベルリオーズのプロジェクトのリハーサルを取材する機会を得ることができた。彼らの目指す音楽とは何か。5月、ロトは読響定期にも客演する。

今をときめくカリスマ指揮者、フランソワ・グザヴィエ・ロト。彼が2003年に設立したピリオド楽器オーケストラ、「レ・シエクル」の人氣は日本でも急上昇中である。

今回、ベルリオーズ・ツアーに向けて集まった「レ・シエクル」の取材がバリエで実現。プログラムは、彼らの十八番（幻想奏曲）と（ロミオとジュリエット）。ピッチは438Hz。ガット弦でほぼワイブラートなし。オーケストラの配置もベルリオーズ時代の典型的なものである。

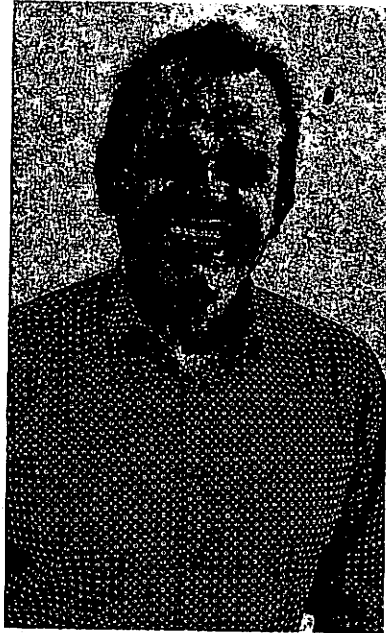
ロトが限らない信頼を寄せるメンバーたちは、皆が情熱的で陽気。彼らは「また日本に行きたい」「日本大好き」と言いながら、熱心にベルリオーズの時代の楽器を解説し、撮影にも気軽に応じてくれた。

ロトと共にこだわりの音色が織りなされる。楽器それぞれの輪郭が際立ち、生き生きとダイナミックな演奏ながらアグレッシブさは皆無。

「ピリオド楽器で当時のレパートリーを演奏」というコンセプトのオーケストラは今までも存在したが、「レ・シエクル」独特のサウンドはどのように引き出されるのだろうか。作曲家の意思を追求し再現する

——先目フィルハーモニー・ド・パリの演奏会でも感じたのですが、「レ・シエクル」の音色は、個々の楽器のカラーはくっきりとし

Les Siecles & François-Xavier Roth



フランソワ・グザヴィエ・ロト
François-Xavier Roth
1971年、パリに生まれ。17世紀から現代作品まで、オペラから室内楽に至るまで幅広いレパートリーをもつ。フルート奏者として活動し、2000年にドナテル・フリック指揮コンクールで第1位。ジョン・エリオット・ガーディナーのアシスタントを務める。03年に古楽オーケストラ「レ・シエクル」を創設。11年から南西ドイツ放送首席指揮者

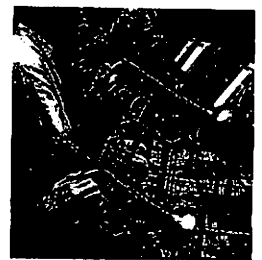
ているのに、交響する響きが絹のようにつややかで、独特の味わいですね。木管の音色など機で熟成された上質なワインのような懐かしい風情が漂ってきます。

ロト（以下R）「レ・シエクル」には、通常とは違った形でオーケストラ演奏をしたいと思っている音楽家たちが集まっています。私たちにとって一番重要なこと、それは作曲家の意思の追求と再現です。

私たちの音色が聴衆の感覚に訴えるものがあるとするば……リハーサルを聴いても感じられたことと思いますが、皆が室内楽のように、全力投球で演奏しているでしょう。各々が自分の楽器の特性を知り尽くしていますし、また、私の要望に応じて珍しい古楽器の演奏をマスターしてくれたメンバーも多々います。ここでは誰も冒険を厭わないのです。私たちが求めているのは「インパクト」す

なわち「何を聴衆の心に引き起こすか」。音楽で難しいのは、いつも同じ作品が繰り返し演奏されるので、聴衆は聴く前からすでに結末を知っているということです。だからこそ私たちは、演劇俳優のように、どこへ行き着く

私たちが求めているのは「インパクト」、『何を聴衆の心に引き起こすか』。いつも同じ作品が繰り返し演奏されるからこそ私たちは、どこへ行き着くのか、どんな風に終わるのか、聴衆に前もってわからないように演奏しなければなりません。



コルネット

のか、どんな風に終わるのか、聴衆に前もってわからないように演奏しなければなりません。「レ・シエクル」の愛曲を「劇団の一座のよう」と言う人がいますが、この例えはとても気に入っています。

ベルリオーズは「レ・シエクル」にぴったりのレパートリーですが、ドビュッシーやストラヴィンスキーなども継続しますし、いくつもの方向性でこれからの活動を展開していきます。

——ベルリオーズの著書「近代楽器法と管弦楽法」からは、彼が楽器の音色の特性に対して非常に詳しくとしたイメージを持っていただくことができますね。指揮者の視点から、これをどのように考えられますか。

R ベルリオーズの音楽の魅力は、アーティ



キュレーションや色彩感の芸術、楽器の組み合わせ効果などから生まれています。モダン楽器の厚みのある音とは全く異なる面がありますから、モダン楽器で演奏する場合は細心の注意を払わなければなりません。やはり当時の楽譜だからこそ、ベルリオースの演奏に理想的なトーンが得られることは明白です。

ベルリオースに限らず、「オーケストラ」を改革し、新風を吹き込んだ作曲家——古くはラモ、リユリ、そしてマラー、ドビュッシー、シエーンベルク、ストラヴィンスキーなど——が、革新のために必要とした「手段」は、彼らが生きた時代の楽器です。彼らの音響世界の理解は、その時代からかけ離れた楽器を通してでは、少し難しいと思います。また、当時の楽器だけでなく、当時の演奏法、演奏技術に関する知識も大切ということなのです。

——ベルリオースの演奏解釈について、長く助手を務めていらしたジョン・エリオット・ガーディナーから影響を受けたことありますか。

R 非常に多くの面で——彼のことは尊敬してやみません。素晴らしい音楽家です！
ベルリオースに関してだけではなく、どのように音楽作品を守っていくべきかということ、そして演奏に全身全霊を傾けること……。ベルリオースはもとから好きでしたが、ガーディナーと行った（トロイの人々）や（ペンヴェヌート・チェリーニ）の仕事を通じて、これらの作品を再発見し、フランス音楽への愛もさらに膨らみました。

ベルリオース時代のオーケストラ

——このオーケストラの配置は、ベルリオース時代の典型的なものでか。

R そうです。ヴァイオリンが前方、コント

ラバスは管楽器の外側、最後方に並びます。場合によっては、チェロをもっと遠くに配置することもありますが。またベルリオースはハーブを好んだのですが、音量の小さい楽器であることから、指揮者の前に配置するのが適していると考えたのです。

——《幻想交響曲》の初演は1830年、版には1845年、1855年のものがあるようですが、「レ・シエクル」が使用される版は何ですか。またスコアに関してどのような研究をなさいましたか。

R 私たちは最終稿、つまり1855年版を使っています。

私はベルリオースの手書き初稿をフランス国立図書館で調査しましたが、現在の時点では、オリジナル稿は不完全で、欠けているパートがあるのです。なぜなら、ベルリオースは楽譜に改訂を行う程度、前稿を意図的に隠してしまっているからです。私は今、その隠された部分を開いて、オリジナル稿を再構成しようと調査を続けているところです。将来、抜粋でもオリジナルヴァージョンを演奏したいと思っていますから。

——ベルリオースによる「ある芸術家の生涯」の解説文の役割について、どう考えられますか。

R やはり作曲の中軸となつていてと思えます。当時ベルリオースは、彼の人生の激動の時期にいましたし、単なる楽譜のための交響曲ではなく、壮大な「交響詩」、すなわち「音楽によって感情のうねりを描写する作品」を創りあげるといふ意図が最初からあつたわけですから。

——ベルリオースの情熱的な性格や奇想天外な人生に、自己投影をなさる部分がありますか。

R 部分的には（笑）。



ナチュラルホルン



セルロ

ピリオド楽器オーケストラ、「レ・シエクル」のリハーサルで指揮するロト。6月、脱離「メトロポリタン・シリーズ」に客演する〈日時・会場〉6月24日19時・東京芸術劇場、25日19時・ザ・シンフォニーホール〈曲目〉ベルリオース《ペンヴェヌート・チェリーニ》序曲《幻想交響曲》、サン＝サーンス《ヴァイオリン協奏曲第3番》、〈共演〉神尾真由子（vn）〈問合せ〉0570・00・4390



置をお考えですか。

R できればそうしたいですね。でもホールを見てみなければ……プログラムの他の曲目との兼ね合いもありますし。

私はモダン・オーケストラでベルリオースを指揮することも頻繁ですが、「レ・シエクル」で得た経験のお陰で、よりの確な説明ができるのではと思っています。例えば、弦はヴィブラートを少なめに、管楽器のアタックは輪郭をさらに鮮明に、といった指示を出すと思いますし、またピリオド楽器に近い響きを得るため、バランス面での提案をすることも私の役割です。

昨年12月にNHK交響楽団を指揮したのが初めてですから、私の日本のオーケストラに対する知識は多くありませんが、日本の方々は柔軟で「対話」が可能であると感じています。指揮者とオーケストラは、投げかけたことがどんな反応を引き起こすか……という、ピンポンのような関係ですから。

——日本の演奏会が待ち遠しくなりました。私は実は日本の大ファンなんです。日本の方々が、「集団」の中で周囲を配慮しながら生きるといふ美徳を身に付けていらつしやることも素晴らしいと感じています。